

～千年経っても変わらない風景を残す！～

『里山千年構想』

昔からの山の姿を取り戻し本当の里山の魅力を再生！



平成27年8月改訂

美濃加茂市



「里山への思い」

日本の国土の3分の2は森林です。日本は森林資源が豊富な国です。日本人は、古来より季節や自然を生活の中に取り入れ、自然と上手く付き合うことで生活を豊かにしてきました。しかしながら、便利な暮らし、物の豊かさを追い求めた結果、人と自然との関係はどんどん薄れ、自然の中に人の手が入らなくなったことで、かつての里山は荒廃していきました。

日本全土で都市化が進む中、美濃加茂市には、私たちの生活の近くに緑豊かな山々と木曾川や飛騨川をはじめとした多くの河川があり、なにより豊かな自然に囲まれた里山の風景が残っています。

里山は、人が手を加えることで保たれてきました。

そんな里山へ、現在、注目が集まりつつもあります。

今こそ、美濃加茂市にある森林や里山をはじめとした自然がある空間を見直し、これからの時代に向けた新しい提案をしていくべきではないでしょうか。

私は、「里山」というテーマには、環境や自然はさることながら、子育てや教育、観光、産業など多岐に渡る可能性が十分にあると考えています。

平成25年に始動した里山プロジェクトが2年目に入りました。

市民の皆さんや専門家の方々と連携しながら、日本中が注目するような、里山的美濃加茂モデルを提案していきます。

是非、皆さん、一緒に考え、話し合い、汗を流し、美しい里山の風景を孫子の代まで伝えていきましょう。

平成27年8月

美濃加茂市長

藤井 浩人

も く じ

「里山千年構想」の基本的な考え方

はじめに

めざす里山の実現にむけて

里山再生の場

概要版

里山整備の基本的な考え方

里山の現状と課題

里山再生基本政策

- ① 里山の整備
- ② 里山の資源活用
- ③ 整備後の里山利活用

政策① 里山の整備

美濃加茂市内の里山林を整備します

- ①美濃加茂市内の里山林の整備
 - 里山を整備する必要性
 - 計画的な里山林整備
- ②持続可能な里山のための人材育成
 - 人材育成の必要性
 - 里山整備のための人材育成

政策② 里山の資源活用

美濃加茂市内の里山資源を発掘します

里山資源の発掘

里山資源の活用法

政策③ 整備後の里山利活用

「里山再生・活用モデル地域」

整備後の里山の利活用

里山の利活用を推進します

「里山千年構想」の基本的な考え方

はじめに

昔、人々は日々の暮らしの中で里山のあらゆるものを利用し、循環型の暮らしをしてきました。しかし、石油などの化石燃料の普及と共に里山の恩恵を必要としなくなり、人の手の入らない里山は荒廃し、美しい風景までもが失われてしまいました。

しかし、近年この「便利な暮らし」を見直す動きが始まったのを受け、美濃加茂市でも失われた里山の風景や、埋もれた里山資源を取り戻し、未来永劫変わらぬ美しいふるさとの風景を残していくため「里山千年構想」を策定します。

「里山千年構想」では、荒廃している里山を整備し、維持管理を持続させる方法を「里山整備モデル地区」で、整備により再生された里山を活用する方法を「里山再生モデル地区」として検証していくことを提唱します。

めざす里山の実現に向けて

美濃加茂市を「里山都市」として全国に発信し、市民が自慢できる里山風景を再生するために、次のことを実現する取り組みを進めていきます。

- ・周辺の農地を含めた整備された美しい里山風景を見るために人々が訪れたい場所を作る。
- ・人と自然が共存し多くの人々が里山に関わりをもつことで、地域全体で里山を管理できる仕組みを作る。
- ・里山の持つ資源や生み出す資源を活用し、自立した里山（整備に必要な費用を生み出す里山）ができるよう「新時代の里山」を提案する。
- ・地域の特色を生かした利活用を行い、整備された里山を守る。

里山再生の場

美濃加茂市内一円の里山林及び里山の景観の一部を担う農地等とします。また、広域的な取り組みについては、周辺市町村との連携を積極的に進めます。

里山整備の基本的な考え方

■里山の現状と課題

昭和40年頃までの里山林は、人が生活に必要な資源を得るために出入りし、里山林はその生活の中で適正に管理が行われていました。しかし、生活様式の変化等で次第に里山林は放置され、里山林を覆う広葉樹は「林齢のピークの60年生」に近づいています。こうした状況に加えて、近年、マツ枯れ、ナラ枯れで高齢大径木が被害を受け母樹としての機能が低下したり、広葉樹の伐採放置林に竹が繁茂し生態系がくずれるなど、里山林の荒廃が年々拡大し、森林の公益的機能が発揮できなくなっています。

荒廃した里山林は、野生動物の絶好の住処となり、農作物被害の増加に繋がっています。また、人が入らず放置された里山の林道周辺では不法投棄が増加し、その周辺の里川や農地の水環境への影響が危惧されます。

こうした中、荒廃していた平成記念公園北部未利用地域全体の森林整備事業を実施したことで、これまで立ち入ることが難しかった山林が、散策できるような環境にまで回復しました。

この結果を踏まえ、荒廃している里山を整備し、維持管理を持続させる方法を「里山整備モデル地区」として、また、再生された里山を活用する方法を「里山再生モデル地区」として検証していくことを「里山千年構想」で掲げ、それを基に「里山千年実施計画」を策定し美濃加茂市内すべての里山を昔の里山風景に再生・維持管理し、持続可能な里山をめざします。



■里山再生基本政策

① 里山の整備

- ・ 計画的に面整備を行い地域全体を整備します

② 里山の資源活用

- ・ 里山にある資源を有効活用します

③ 整備後の里山利活用

- ・ 整備された里山の利活用を推進します

政策① 里山の整備

- ・美濃加茂市内の里山林を整備します
- ・継続的に整備できる人材を育成します

美濃加茂市内の里山林を整備します

① 美濃加茂市内の里山林の整備

<里山林を整備する必要性>

美濃加茂市には総面積の39.6%に当たる2,965haの森林があり、そのうち人工林が770ha、天然林が2,100haとなっています。

人工林は、もともと木材の利用のために植林されたものであるが、間伐の遅れなどにより、優良材の生産が困難な状況となっているだけでなく、森林が適正に管理されていないといった課題も抱えています。

天然林では、里山として利用されなくなったことで高齢化したアベマキやコナラ等にナラ枯れの被害、アカマツには松くい虫の被害が目立ち、倒木や枝の落下などの危険がある樹木が増えています。広葉樹の勢力が衰えた里山では、成長の早い竹が繁茂し、周辺の植生にも大きな影響を与えています。



整備前の里山

○住民の安全を守るための里山林整備

森林は、人々の生活に欠かせない水源としての機能や、土壌を維持し土砂災害等から里を守る機能を果たしています。例えば、間伐の行われない人工林では樹木の根の発達が悪く、地表まで光が届かないため下層植物が成長しないことから、森林が土壌を保持する力が弱くなり、山崩れ等の災害が起こりやすくなります。

また、荒廃して人が近づかなくなった山は、林道周辺で不法投棄が増加します。投棄されるものの中には産業廃棄物や放置車両などもあり、水源となっている山では下流の河川や農地の汚染の原因になります。

このような事態は、人家から離れた深い山だけでなく、里山でも十分に起こり得るため、安全な暮らしのためにも、放置されたままの山は減らしていかなければなりません。

○鳥獣被害の防止のための里山林整備

人の出入りがなくなり放置された森林や、侵入竹の増加によって拡大した竹林は、里の周辺に野生動物の住処を作り出しました。里との距離が近づいた野生動物は、里の農地や農作物に大きな被害をもたらしています。野生動物が住みづらい山は、不用な木を伐り下刈りがされた明るい山であり、人の出入りが絶えない山です。

○環境を守るための里山林整備

木々は異常気象を引き起こしているといわれる地球温暖化の原因となる二酸化炭素を吸収し固定する機能があり、放置された山林よりも整備され管理された山林の方が多くの二酸化炭素を固定するといわれているため、里山を整備することは地球温暖化の防止にも貢献しています。

また、森林は多くの動植物を育んでいます。森林で生きる生物の中には、明るいところを好むもの、湿ったところを好むもの、特定の樹木を餌としているもの等、様々な環境を必要とするものが混在します。里山を整備し、太陽の光を調整することで、様々な生物に必要な環境が生まれ、人の営みの中で様々な樹種が里山に植えられることで、更に多くの動植物が繁栄できる山となります。多様な生態系を次世代に残すことも、里山の大切な役目です。

○愛着を持たれる空間の創出のための里山林整備

里山の風景は、日本の原風景といわれ、今でも、こどもの頃に森で遊んだ思い出や、薪割り作業、ヤギを家で飼っていた思い出を楽しそうに語る方もあります。過疎化や高齢化が心配される里山において、住民が愛着を持っている懐かしい風景を取り戻し、守ることは、故郷の魅力の再発見に繋がり、市民が自慢のできる里山風景が地域の活性化の切り札になります。



以上のことから、里山林を整備することは山林所有者だけの責任ではなく、地域の問題として行政が果たすべき責務でもあります。そして、その里山林を含む里山を守り育てていくことは、地域全体の役割でもあると考えます。

<計画的な里山林整備>

今まで個々で管理されていた里山林を数年間の周期で計画的に整備を行います。里山を「面」として管理するため、住民の意向や専門家の意見を踏まえながら整備計画を立て、侵入竹の除去、不用木や危険木の伐採、森林病虫害防除、修景及び環境保全等を、整備後の利用と共に考えながら効率よく行います。

面での整備が行われることで、地域全体を、その活用方法に合わせてバランスよく維持管理することができ、現在から未来にわたっての展望を描くことができます。これらの整備費用を、原則として行政が負担することで、早期の整備を促進します。一方で、整備の過程で発生した伐採木等の活用についての研究を進め、里山の維持管理等活動費用を里山から生み出す、持続可能な里山の仕組みも考えます。

整備計画

- ・市内全域を効率よく整備するため地区ごとの整備計画を策定し、各年度に整備する区域を決定します。
- ・様々な施策との調整を図りながら、整備内容を検討します。

説明会

- ・該当地域の自治会等に整備計画を説明し、協力を依頼します。
- ・山林所有者に個別に整備内容を説明し、事業実施への同意を得ます。

整備

- ・決定した整備内容に合わせ、里山林の整備を実施します。
- ・整備と並行して、伐採後の材の利用や植樹、下刈り等維持管理の計画を立てます。

【整備計画】

今まで山林所有者が個々で管理していた山林を面として管理するために、地域住民等の意向を踏まえ整備計画をたてます。

山林の所有者等と調整しながら整備区域を決め、計画において想定される活用方法を前提に、区域内の里山の状態やその他の施策を考慮して整備内容を決定します。

【説明会】

整備区域周辺の住民や山林所有者に対して、整備区域や整備内容に関する説明会を行います。説明会の中で、整備後の維持管理への協力を依頼します。

また、山林所有者には個別に整備内容の説明をし協力を依頼すると共に、里山の利用に関する協定の締結を行います。協定の中では、行政が山林の整備を

行い、山林にある樹木等の活用を進めること、多くの人が自由に出入りできるよう、開かれた里山とすること等を明記し、整備と利活用がスムーズに進められるよう配慮します。

【整備】

決定された整備区域及び整備内容に基づき里山林整備を実施します。

市が林業事業者等と調整し、侵入竹の除去、不用木や危険木の伐採、森林病虫害防除、修景等環境保全等を行います。将来的には自主的に活動する団体等に作業の一部を任せるとも検討します。

整備に併せて、伐採後の材の利用や植樹、下刈り等維持管理の計画を立てます。

整備の流れ



【里山整備モデル地区】

整備された里山を持続的に維持管理していくために、山林所有者だけでなく地域住民やボランティアの協力を得ながら整備を行い、里山整備の作業を学んでもらえるような環境を整えつつ、維持管理作業の参加者を増やしていくことで持続可能な維持管理が行える地域を「里山整備モデル地区」とします。

② 持続可能な里山のための人材育成

<人材育成の必要性>

林業事業者等が伐採を行い、林内整備が行われた里山林も、放置されれば再び荒れた山に戻ってしまいます。そのため、整備後も定期的な維持管理が必要となります。定期的な維持管理が必要な里山林は、森林整備を進めることで範囲が広がり、その作業は膨大なものとなります。行政や山林所有者だけでその役割を担うことは不可能で、地域住民の協力が必要です。

しかし、山林所有者や地域住民の高齢化などで、その役割を担うことのできる人材は減少しつつあります。その一方、近年は都市部にも自然との触れ合いを求めて田舎暮らしを始める人も出てくるなど、潜在的なニーズを含めて、里山での様々な活動に関心を持つ人が増加しています。また、薪ストーブを購入するなどして、暮らしの中に里山の資源を取り入れる人も増えてきました。

これからの美濃加茂市では、地域住民を含む市内外の人たちの中から、里山の整備に関心のある人を掘り起こし、山林所有者に協力を得ながら、興味のある人たちに活動の場と生涯の楽しみを提供できるような施策に取り組みます。



<里山整備のための人材育成>

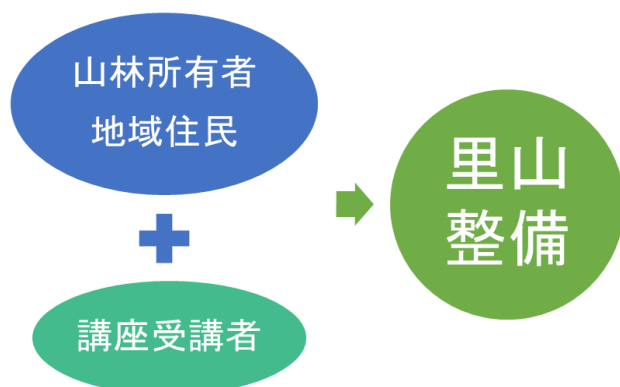
里山での活動に興味を持っている人が多くいる中で「関心はあるが、方法がわからない」「活動をしたいが、山を持っていない」といった理由で、実行に移せない人もあります。

そのため、市では里山整備を学べる講座を開講し、里山整備のノウハウを体験してもらうと共に、同じようなことに関心を持っている人と知り合うきっかけを作ります。里山での作業は一人ではできないことも多いため、講座を通して知り合った人同士が、一つのグループとして里山での活動を続けてもらえることを期待しています。

また、山林所有者に対しては、行政が整備を行うことだけでなく、里山整備にボランティアとして取り組む人たちの活動を実施すること、所有地内で伐採した不用木等を利用することにも協力をお願いします。



協力することに対して同意を得られた里山を、講座の修了者や地域住民が自主的な活動の場として利用することで、「整備をして欲しい人」と「整備をしたい人」が協力し、整備後の里山をいつまでも維持管理していける環境を「里山整備モデル地区」とします。



政策② 里山の資源活用

- ・美濃加茂市内の里山資源を発掘します
- ・里山資源のビジネス化を研究します

美濃加茂市内の里山資源を発掘します

<里山資源の発掘>

化石燃料の出現によりもたらされたエネルギー革命は人々の生活を一変させ、里山に存在した循環型の暮らしを衰退させました。それと同時に里山の広葉樹林や竹林、草地等の利用価値の多くは失われ、里山は荒廃してしまいました。里山を整備し、継続的に維持管理していくためには、里山の新たな価値を発見し、人々が再び里山を利用するようになることが一番の近道です。

里山を整備を進めると共に、樹木やその他の林産物、動植物、里山の風景そのものまでを含めた「里山の資源」をできるだけ多く発掘し、人々が自然と足を運びたくなる里山を目指します。



○里山の資源

昔から里山の暮らしで利用されてきた広葉樹の二次林は、薪炭としての利用が減少したことから放置され荒廃してきました。この広葉樹の利用方法を再発見し、再び里山を生活に取り込むことが、里山資源の活用の第一歩になります。広葉樹以外にも、植林された針葉樹、竹、古くからこの地域で栽培されてきたしいたけ等、多くの可能性を持った資源があります。また、過去に使われてきたもの以外にも、里山には多くの可能性があると考えています。

これらの里山資源の発掘には、専門家や専門教育を行う学校の協力が必要です。市はこれらの研究のフィールドを提供し、積極的に連携を図ります。また、地域住民やNPO団体等と連携して里山資源の発掘やその他の活動が行えるよう様々な働きかけを行います。

○学校等との連携

美濃加茂市内や近隣には多くの教育機関があり、農林業や木工等の専門的な教育を行う学校もいくつか存在します。里山をこれらの学校の野外実習や研究のフィールドとして活用してもらえるよう積極的に働きかけます。里山をフィールドとして活用してもらえる学校とは里山再生に関する協定を結び、里山での調査や里山整備、環境づくり、資源活用等の研究成果を実際の里山の利活用に役立てる



ことができるようにします。

また、専門的な教育機関だけでなく、保育園や幼稚園、小中学校にも積極的に里山の利用を呼びかけ、里山の利活用の新しいシステムを構築していきます。

<里山資源の活用法>



以前の里山は、人が生活するのに必要な資源を確保するために整備され、その里山から供給される物で自給自足、あるいは商売をすることで生活を営んでいました。そして、生活に必要な里山を子や孫に残していけるよう常に人が手をかけて育て、里の人々が代々暮らしていく基盤となっていました。

そうした昔の生活の中で生かされてきた技術や知恵の中から生み出されるものや新たに発掘した資源が、現在の社会の中でどのように活用できるか研究を行います。資源の具体的な活用法を提案することで、里山が資源の生産の場となり、持続可能な美しい里山が復活すると考えます。

○里山資源の活用例

以前の里山の生活では、広葉樹を薪炭材として利用してきましたが、現在は化石燃料や電気がその役割を担うようになり利用がされなくなりました。

例えば、この広葉樹の木材としての活用法を考えることで、現在放置されている里山林が再び価値を取り戻すことができると考えます。同様に竹林は、以前のように竹細工等に利用されることが減ったため等で過密になり、周辺の広葉樹林や針葉樹林を侵食しています。この竹を破砕機でチップ化して肥料等に利用することで、竹の処分が進むと共に、竹林を残して管理する動機ともなります。

また、里山そのものが森林浴やバードウォッチング、ハイキング等の心身の健康に寄与する場としての価値を持っています。里山の整備を進めつつ、森林内を移動できる遊歩道を繋いでいくことで、多くの人にとって活用しやすい場所となります。

このような里山資源の活用例を少しでも多く発掘し、継続的に活用していくために必要なだけの資源を計画的に確保していくことが重要です。

○里山活用の拠点

里山資源の活用が進むと、地域住民だけでなく多くの人を訪れるようになります。資源の活用法と同時に、これらの人々が利用できる拠点となる場所が必

要になります。

美濃加茂市には、森林公園として整備された「みのかも健康の森」があり、市内中心部の里山へのアクセスが良いため、今後里山での活動や散策等の利用者の拠点として活用していけると考えています。遊歩道等の整備に際しても、ここを起点として計画していくことで利便性が確保できます。

また、美濃加茂インターチェンジに隣接して、里山の暮らしを再現した公園施設「日本昭和村」があり、こちらは遠方から美濃加茂の里山を訪れる人々の玄関口として活用していくことができます。

現在ある公園施設以外にも、周辺の空き家の活用など様々な視点で里山にある資源の活用を進めていきます。



政策③ 整備後の里山利活用

- 「里山再生・活用モデル地域」
- 里山の利活用を推進します

「里山再生・活用モデル地域」

<整備後の里山の利活用>

「里山再生モデル」の拡大

千年先も変わらない里山風景を残していくため、整備が完了した里山を「里山再生モデル地区」として利活用を進めていきます。

既に平成記念公園北部未利用地では先行して利活用モデルの研究を行っていますが、周辺の山林についても必要な整備を実施した地域から順に「里山再生モデル地区」として管理し順次利活用を進めていきます。

利活用には、地域ごとの特色を生かし、より効果の高い方法を優先して行います。

「里山再生モデル」の多角化

里山林の整備を行うことで、失われていた里山の暮らしの基本となる部分を取り戻すことができます。しかし、里山での生活は森林だけで成り立つものではありません。里で人々が木を使い、田畑を耕しながら生活することで、本来の循環型の暮らしが成り立ちます。

里山林の整備と合わせて、里の農地を復活させるための方法や現代における里の暮らしそのものを里山再生モデルとして構築していきます。

そのためには、米作りや野菜作り、美濃加茂市の特産であるシイタケや蜂屋柿、山之上の梨等の農業と林業その他の持続的な営みを里山に取り入れ、多面的な視点から里山再生に取り組みます。

また、整備の手法として植樹等のイベントを企画したり、企業の社会貢献活動（CSR活動）で行う企業の森を誘致することで里山に関わる人を増やすことも重要な要素です。

里山整備

維持管理
利活用

里山
モデル

里山の利活用を推進します

○里山の利活用の推進

①里山の再生・保全

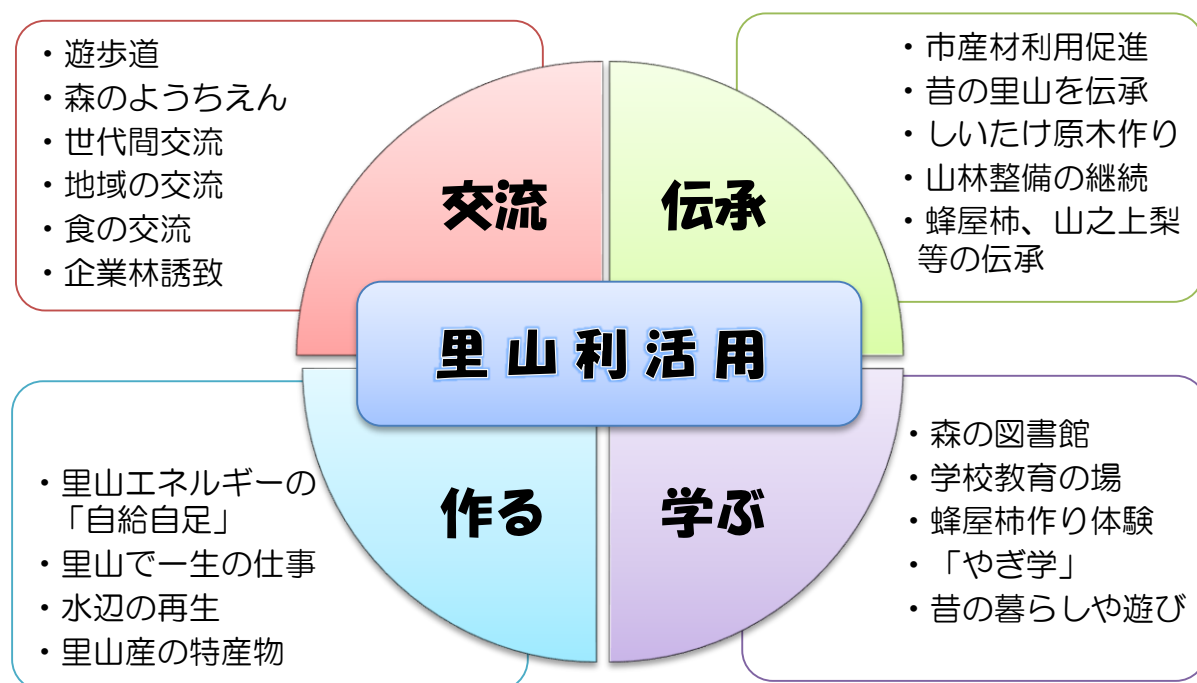
里山がもつ環境の保全、良好な景観形成、余暇及び教育に係る活動の場の機能を維持するため、農業、林業その他の持続的な営みを再生・保全します。

②里山の活用

農業、林業だけでなく、いつでも気軽に里山に入ることが出来るよう山林整備を継続して行います。人が山に入ることにより里山の保全が維持されるため、里山を誰でも散策できる遊歩道を整備するなど、「交流」「伝承」「作る」「学ぶ」を基本に活動を行い人々が年間を通して訪れたくなる里山をめざします。

持続的かつ効果的な里山の整備及び活用を促進するため、行政だけでなく地域住民の手で、里山を再生・保全・管理をしていきます。私たち世代が昔の暮らしを見直し「山を守る」ということ「山と共に暮らす」ことなどを受け継ぎ、次の世代、その次の世代にしっかりと伝えていきます。その他美濃加茂市の里山を訪れる訪問客の増加対策としては、堂上蜂屋柿や山之上の梨など「美濃加茂市でしか買えない」里山の特産物や、里山の木材を利用した「木製品」や「美濃加茂のしいたけ」などを企業や各種団体等と協働して生産・販売できるよう「里山資源」を有効活用できるようにします。

また、企業林誘致（CSR活動）を働き掛けることで、里山の維持管理や資金及びボランティア参加等の協力要請や植林等のイベントなどを行うことが可能となり、美濃加茂市内だけでなく都市部や周辺地域からも多くの人々が美濃加茂市を訪れるようになります。



③雇用の場としての『里山』

里山林の整備・維持管理や「学ぶ」「遊ぶ」などを目的に都市部からの訪問客が増えることで、「里山を維持管理していくための雇用」、「里山産の特産物を生産・販売する雇用等」、新たな雇用の場を提供できることは、美濃加茂市の若者が美濃加茂市に住み続けてもらえること、都市部からの転入者が増加することに繋がり、里山整備・維持管理や利活用は人材が集まることに繋がります。

④広葉樹の調査・保全

美濃加茂市周辺では、里山と呼ばれるアベマキ、コナラなどを中心とする2次林が北部を中心に多くあります。これらは、かつて人々の生活の中心となっていました。山の木は薪や炭などの燃料として伐採され、小さな木は柴として刈られ、木の葉は「ゴカキ」として集められていました。このような風景は里の暮らしとしてかつては当たり前のようにみられ、生活の中に山の暮らしがありました。燃料として使われていた樹木はおよそ20年ごとに伐採され、その後は脇芽や低木が生え、やがて大きな樹木となりました。里山はおよそ20年間のサイクルで循環していたのです。

しかし、私たちは現代の里山に多くの問題を抱えています。地域の山は放置され、侵入竹が増加し藪となってしまいました。近年、直径40cmを超える大きなナラ類の樹木がナラ枯れ(注1)を起こしています。そのため、全体の環境調査を行い里山林の保全・整備計画をたてることで伐採を定期的に行い、問題のある里山を「里山を用事のある場所に造り変えること」でかつての姿を取り戻すことがこれからの課題だと思えます。

注1：ナラ枯れはカシノナガキクイムシが原因でコナラ・アベマキなどが枯死するもの。近年全国に広がっています。

この環境調査によって、この地域の環境を知り多様な動植物の貴重種を守る里山を作ることにより、千年先まで守り続けたい里山とします。



○里山活動協定の推進

美濃加茂市の山林全体が再生モデル地域として発信していくため、行政や農業及び林業関係団体等と土地所有者が里山の保全、整備及び利活用に関して合意を形成し、整備後の里山を保全、整備及び利活用に関する活動を行うことができるよう里山活動協定を推進します。また、土地所有者及び地域住民の合意を得て里山の維持管理を行うために、次に掲げる取組を推進します。

- 1 行政、地域住民、農業及び林業関係団体と連携し、里山に関する知識や管理技術の講習会等を開催し、地域みんなで持続可能な維持管理を行います。
- 2 里山の環境保全や多様な生態系に配慮した森林整備を継続的に行います。
- 3 里山資源の有効活用のため調査研究及び活用を推進します。
- 4 里山を「地域みんなで守り、地域みんなで活用する場所」として位置づけます。

○里山構想の視点

1. 「交流」の場としての里山

里山には豊かな自然が多くあり、人が集まるための資源があります。
その資源を利用して、人々が交流できる場を作ります。

2. 「暮らし」の場としての里山

里山での生活は、山からの恵みを得て営まれていました。
その生活の知恵を、次世代に継承していきます。

3. 「生産」の場としての里山

里山の気候風土を利用した特産品を、昔から作り続けてきました。
その技を継承し、人材育成をはかります。
里山資源の有効活用を図ります。



千年先も持続可能な里山整備